

その意義は大きく、基本的と言われながらとかく見過され勝ちな、分類学の仕事に光を当ててくれた同氏の業績に対して、あらためて拍手を送りたい。

岩槻氏は東大植物園就任以来、同園の経営改善に力を注いだばかりでなく、絶滅危惧植物のハハジマノボタンやヒスイカズラの種保全研究をリードして、植物園が遺伝子保存事業に積極的に関与する見本を示した。環境庁の野生生物調査事業にも、座長として調整・とりまとめに奔走している。その成果の一つである「我が国における保護上重要な植物種の現状」(1989)は、日本植物の危機的現状をはじめて知らしめたものとして、世にショックを与えた。これに続いて公表された著書「日本絶滅危惧植物」(1990)、「植物からの警告」(1994)

などは、この衝撃をあらためて広く定着させ、従来の「保護」という立場から踏み出して、自然界における種の多様性の役割を、分類学の立場から一般に理解してもらおうことを意図している、

植物分類学の人は、世間的に目立とうとしないのを美学とする傾向がある。京都大学時代の岩槻氏を思うと、近年の活躍ぶりは思いのほかである。6月20日のお祝いの会で同氏が語ったところでは、植物園就任に当たって、種の保全についての園の役割をPRするために、積極的に動くことを決意したとのことである。今回の受賞はその成果であるばかりでなく、分類学の役割を「種の多様性」という、これまで無かった観点から世に定着させた功績は、記憶されるべきである。

(金井弘夫)

新刊

□長井真隆：とやま植物誌 247 pp. 1994. ¥1,800.

富山県は海岸近くの照葉樹林から立山や白馬岳の高山植物群落まで、比較的狭い地域に様々な群落が見られる特徴があり、また深い黒部溪谷の特殊な環境は、日本海側ではここにしかないツガ林や、内陸型のカラマツ林を成立させている。日本海側に位置するため、深い積雪や冬の強い季節風などの関係で、太平洋側には見られない群落が形成されているなど興味深い地域である。本書はそれぞれの異なる環境に適応してどのような群落が形成されているか、またその群落を代表する植物がどのような生活をしているかを、一般の人に解りやすく解説したものである。山地の植物と環境との関係とは別に、著者が力を入れているのは、平野部の植物である。剣山や立山から流れる黒部川や常願寺川は、下流に広い扇状地を作り、その上に人の生活が営まれている。家のまわりにつくられる屋敷林による植物の利用と温存、伏流水が湧き出ることによる低湿地の水草や、そこに適応した沢スギなどが述べられている。スギに関しては山地の立山スギも詳しく述べられているのだから、片貝川の洞スギのような日本海側特有な形を持つものも載せる必要があるだろう。植物を基礎

とした博物学の傾向の強い本である。学問的な解釈も必要だけれども、博物学的な面をもっと強めれば、さらに豊かな内容のものとなるであろう。地方の植物誌のひとつの行き方を示すものとして関心がもたれる。入手先は次のとおりである。シー・エー・ピー・タウン情報富山。富山市大手町6番14号 市民プラザ3F。 (山崎 敬)

□Editorial Committee of the Flora of Taiwan: *Flora of Taiwan, 2nd ed. Vol. 3* 1084 pp. 1993. Department of Botany, National Taiwan University.

台湾大学の黄 増泉氏を長として、初版とは全く異なる編集委員のもとに、台湾植物誌の改定が行われている。委員の中には東北大学の大橋広好氏も加わっている。その第3巻が出版された。マンサク科からセリ科まで、その範囲は初版と同じである。執筆者は初版と同じ人もいるけれど、かなり新しい人になり、内容は初版とはかなり異なっている。日本にも分布する植物が多数あり、日本の植物の研究には重要な参考文献である。日本と関係のある種類で、日本での扱いと異なるものがある。総てに当たる訳にはいかないが一部を挙げておく、将来検討していただきたい。

台湾でヒュウガミズキ *Corylopsis pauciflora* Sieb. et Zucc. としているものは、日本のものと異なり、葉が大きく、花は小さく、果実が大きくて、別種 *C. matsudai* Kanehira et Sasaki として扱ったほうがよいのではないかと思う。

台湾、中国の *Geranium wilfordii* Maxim. は日本のミツバフウロ var. *wilfordii* と異なることは、1948年に原 寛氏の指摘したところで、変種として扱うのが適当と思う（山崎、本誌 68: 237-239, 1993）。

ゴシュユ属に *Euodia* でなく *Tetradium* を使っている。*Euodia* や *Melicope* の属の区別は難しく、人に依って属の見解が異なる。しかし2版で台湾の *Euodia* や *Melicope* を執筆した Hartley は *Euodia* をニューギニア、オーストラリア北部からサモアに分布する7種に限定し、他のものは *Tetradium* か *Melicope* として扱うべきだとした（Gard. Bull. Singap. 34: 91-131, 1981）。この処置が妥当かどうかは、本来の *Euodia* の資料が手元にあまり無いので判断できないが、それぞれの属の特徴を明瞭に把握しており、妥当なもののように思える。同氏はハマセンダンを中国、台湾のものと同じとして *Tetradium glabrifolium* (Champ. ex Benth.) Hartley としている。中国、台湾、日本のものが同種か別種かは別にしても、それぞれ形が異なっているので、そのことは認識する必要がある（山崎、本誌 68: 215-218, 1993）。Hartley の分類に従うと、小笠原のムニンゴシュユは *Melicope* になる。Hartley and Stone はハワイとマルケサス諸島の固有属とされていた *Pelea* を総て *Melicope* に移した（Taxon 38: 119-123, 1989）。*Pelea* に近い小笠原の *Boninia* も、いずれ *Melicope* に合一されるであろう。いずれも近縁の属だから、属の定義を変えれば、学名が変わることはやむをえない。Hartley の定義では *Melicope* が変異に富む属となるので、属内の体系はしっかりしたものを作ってもらいたい。

Brucea javanica (L.) Merr. とヌルデ *Rhus javanica* L. とは、Linné が命名した同じ *Rhus javanica* を基準とする学名である。*Rhus javanica* の名には Anacardiaceae の標本が選定されているので、*Brucea javanica* (L.) Merr. の名は改めるべ

きである（山崎、本誌 68: 239-241, 1993）。日本には *Brucea javanica* が無いので、どの名が適当か調べたことはないが、村田氏（植物分類地理 36: 177, 1985）に依ると *Brucea amarissima* (Lour.) Desv. であると言う。

ヒナノカンザシの学名は *Salmonia oblongifolia* DC. が使われるのが普通である。ところが *Polygala ciliata* L. (1753) が同じものであり、それを組み替えた *Salmonia ciliata* (L.) DC. を使わねばならない。

Ilex sugerokii Maxim. var. *brevipedunculata* (Maxim.) S. Y. Hu は日本のアカミノイヌツゲで、日本では日本海側に分布する植物である。太平洋側のクロソヨゴ var. *sugerokii* ならとにかく、var. *brevipedunculata* が台湾に隔離分布しているとは考えられない。台湾のものは、葉の鋸歯は鋭く、果実は小さく、果柄はより短い、別種 *Ilex taisanensis* Hayata として扱ったほうがよいのではないかと思う。*I. suzukii* S. Y. Hu も同じ種類かと思う。

Ilex uraiensis Mori et Yamamoto (1932) の異名に、初版には無かったリュウキュウモチ *I. liukuensis* Loes. (1901) が加えられた。琉球のものと同種とすることは賛成であるが、その場合、学名は後者を使わなければならないことは言うまでもない。

I. ficoidea Hemsl. の異名に琉球から書かれたオオシバモチ *Ilex warburgii* Loes. が新たに加えられた。後者は葉が卵形で先が尾状に尖るので、前者から区別できるが、ときに長卵形や披針形のものでるので似てくる。しかし *I. warburgii* の小花梗は萼の二倍ほど長く、果期でも果実より長い、別種として認めてもよいと思う。ただ台湾で従来 *I. warburgii* とされていたものは *I. ficoidea* である。

ヒメクロウメモドキ *Rhamnus kanaguskui* Makino は、沖縄の万座毛の岩地にのみ生育する固有種だと思う。台湾に分布するとなっているが、それは *R. oiwakensis* Hayata だろうと思う。これはヒメクロウメモドキに似ているが、葉の裏面側脈の基部に毛叢があり、ヒメクロウメモドキが無毛であるのと異なる。台湾のものは林内に生えることとされていることから、別の種類とすべきもの

と思う。

ノブドウの学名は長らく *Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv. が使われていたが、より早い学名の存在がわかったので、*A. glandulosa* (Wall.) Momiyama (栲山, 本誌 52: 30, 1977) が使われるべきである。

台湾のツタは日本のツタと同じに扱われているが、琉球以南、東南アジアに分布するアマミナツツタ *A. heterophylla* (Bl.) Merr. である。

台湾のヤブガラシは日本のヤブガラシ *Cayratia japonica* (Thunb.) Gagnep. とされて、台湾には一種類しか認めていないが、台湾では *C. japonica* はまれで、多くは沖縄以南、東南アジアに分布するヒイラギヤブガラシ *C. tenuifolia* (Wight et Arnott) Gagnep. である。初島の琉球植物誌で明瞭に区別されているように、両者は別種だと思う。

台湾で *Grewia biloba* Wall. としているものは、大陸の *G. biloba* と異なるようで、*G. tenuifolia* Kanehira et Sasaki のほうが正しいのではないかと思う。研究する必要のある種類である。

カジノハラセンソウに *Triumfetta bartramia* L. (1759) が使われているが、これは *Bartramia indica* L. の引用をもとに命名された名で、命名規約の上からは不要名 *superfluous name* である。*T. rhomboidea* Jacq. (1762) とすべきである。

台湾で *Myriophyllum propinquum* Cunn. (Cum. とあるが誤り) としているタチモは、Meijden and Caspers が *Fl. Malesiana* (1971) で行なった処置に従ったものと思うが、オーストラリアの *M. propinquum* とは異なり、従来どおり *M. ussuriense* (Regel) Maxim. とすべきだということは、*Orchard* (Brunonia 2: 226, 1980) に詳しい。

台湾で *Bergia ammannoides* Roxb. としているものは *B. serrata* Blanco である (山崎, 本誌 68: 362, 1993)。

Hydrocotyle keelungensis Liu, Chao et Chuang (1961) は、琉球の *H. tuberifera* Ohwi (1951) と同じもののように思われる。

Angelica hirsutiflora Liu, Chao et Chuang は、種類としてはハマウド *A. japonica* A. Gray と同じでないかと思う、変種として扱うのが妥当のように思える (山崎, 本誌 65: 221, 1990)。

細かなことだけれど、*Barringtonia racemosa* (L.) Bl. (1828) は *B. racemosa* (L.) Sprengel (1826) である。また *Osmorhiza aristata* (Thunb.) Makino et Yabe (1903) は *O. aristata* (Thunb.) Rydberg (1894) である。

初版にあったミゾハコベ *Elatine triandra* Schkuhr. の図 (Pl. 819) はキカシグサ *Rotala indica* (Willd.) Koehne を混同したおかしな図であったが、2版では消されている。

初版と変わったのは異名の扱いである。2版では異名を大幅に削ってしまった。したがって上に述べた *Corylopsis matsudai* Kanehira et Sasaki, *Ilex taishanensis* Hayata, *Cayratia tenuifolia* (Heyne) Gagnep. などの、使用するのによいのではないかと思う学名は、2版には異名としてもでてこない。したがって従来使われたことのある学名がどう扱われたかがわからなくなってしまった。初版では主な異名を取り上げ、不明なものは *Insufficiently known species* として科の終わりに付記されていた。2版では付記は殆んど省かれ、異名は省略された。異名を省くことはアマチュア向けの本ならよいであろうか、学術的な内容を目指す本としては不十分である。研究するには初版も欠かせないものとなって、それに代わるものとはならない。細かく載せる必要はないが、初版程度の配慮は必要であろう。

早田、正宗先生の頃に比べると、台湾の植物ははるかに明らかになった。ここでは日本に関係するものの一部を述べたが、日本や中国の資料との比較の上にさらに研究を進めていただきたい。初版に比べると頁も増え、図も多くなった。ただ紙も印刷もやや劣るのは、日本と同様なバブルの崩壊の影響かもしれない。(山崎 敬)

□岩槻邦男 (監): レッドデータプランツ 208pp. 宝島社. ¥2,980.

別名は「日本絶滅危惧植物図鑑」である。いわゆるレッドデータブックとして知られる、「我が国における保護上重要な植物種の現状」(1989年) およびその後の調査に基づき、日本植物の危機的現状を広く一般に知ってもらうために刊行された。はじめ24頁にごく簡単な解説と用語説明がある。